

## 木琴デイズ

(通崎睦美著)

すてきな人と出会ったときのすがすがしさを覚える一冊。主人公の木琴奏者・平岡養一はもちろん、マリンバのソリストである著者の独創的な観察眼にも感銘を覚える。

まずは平岡の生い立ちから渡米、そして日米開戦・帰国までの足跡が描かれる。戦前の日本や平岡家、そして運命の楽器との出会い。口蓋裂で発音が不自由だった少年時代、「いまに、他の人にはできないことで、優れた人間になるのだから」と母親に勇気づけられる。そんな家族の温かさが、彼の中に独特の優しさを育み、「平岡節」ともいえる木琴の音を生み出す。

米国人はそれを愛し、親身に仕事の面倒を見る。優れた伴奏者と出会い、平岡は大きく成長してゆく。開戦前夜にもかかわらず、彼の演奏する「日本民謡集」のレコードも発売される。

開戦後、敵国人の身となった彼にニューヨーク市長までもがラジオを通して擁護する。その人



## すがすがしく新鮮な評伝

開方のたまものと言えよう。

続いて戦時下と終戦後の日本を経験する平岡が、「様式」から「心」へと、その美意識を変化させてゆく様子が描かれる。考察の基礎に著者の演奏家としての能力を使い、録音の分析を行っているところが興味深い。そのためか、彼の内面がよく見える。空襲に見舞われながらも愛嬌いっぱい、「敵国製ですが」と前置きして演奏する姿には、強烈に共感する。

ここで意外な章が登場。木琴の歴史やマリンバとの違いの話だ。違和感を覚えつつ読み進めると、1962年というキーワードにぶつかる。平岡が再渡米したこの年が、楽器にも転換点だったという視点もユニークだ。

最も印象的なのはライバル朝吹英一との比較。著者は元米朝吹に近い立場であったはずだが、平岡を追いながら自身が平岡化してゆく。著者の演奏会に行けば「また平岡に会えるのではないか」という気になる。その演奏活動の将来に進化した「平岡」がいるのだろう。そんな楽しみすら覚える、新鮮な切り口の評伝だ。

(中野順哉・作家)

(講談社・1995年)

つうやき・むつみ 1967年

東京都生まれ、マリンバ奏者。